

**聖学院大学は地域のために何ができるか？ : 児童
・生徒・学生をとりまく教育環境の変化 学校-地域
-家庭**

著者	渡辺 英人
雑誌名	キリスト教と諸学 : 論集
巻	Volume30
ページ	(5)-(7)
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002355/

聖学院大学は地域のために何ができるか？

児童・生徒・学生をとりまく教育環境の変化 学校—地域—家庭

渡 辺 英 人

家庭教育と学校教育

子どもの教育は「家庭教育」と「学校教育」の両方が協力し合って、形作られてきた。例えば、家庭では、父、母に加え、祖父、祖母、そして兄弟、姉妹の関係から、年齢の違う人間関係を学ぶ場であると言える。一方、学校においては、同じ年齢の子どもたちを集め、同じ年齢の人間関係を学ぶ場であると言える。

家庭教育と学校教育、それぞれを「線」として捉えるならば、家庭教育という垂直線、学校教育という水平線が直角に交差して、これらを直径とする円（正円）を描くことができる。子どもの教育を円（正円）で表すとすれば、今日の社会ではどのように捉えることができるだろう。学校教育においては、ひとクラスあたりの人数は少なくなったが、年齢の同じ子どもたちを集めて教育を行う形に変化は無い。しかし家庭においては、核家族化の進展、両親共稼ぎ家庭、あるいは少子化やひとりっ子の増加から、「年齢の違う人間関係を学ぶ」ことは困難になってきている。円（正円）で表すことのできた子どもの教育は、家庭教育を表す垂直線が著しく短いものとなって、円（正円）から楕円、ラグビーボール型へと変化してきているのである。このような変化を大人たちは正確に捉えているのであろうか。

悩める心を持つ子どもたちに寄り添い、居場所をあたえること

このような中、児童、生徒、学生たちにもさまざまな問題が起こっている。東松山市や昨年の川崎市での少年事件の発生では、元々は友人、仲間関係であった子ども同士が、メールのやり取りや、コミュニケーションの

聖学院大学は地域のために何ができるか？

ちょっとしたミス、誤解から、暴力、殺人事件へと発展したものであった。不登校や引きこもり、いじめや虐待、自殺など、「家庭教育」と「学校教育」がバランス良く「人間関係を学ぶ場」として機能していた時代には、その解決のための途が用意されていた。社会や経済、産業の発展は、必ずしも人間の成長の速度とは一致していないのである。人間の行動の動機となり得るものの中で、大きなものの一つとして「ノスタルジー」がよく挙げられる。望郷の念や、過ぎ去った昔を懐かしむ心を指すが、かつてのやり方を持ってきても、本質的な問題の解決にはならない。学校は教育環境の変化にどのように対応できるか。学校－地域－家庭が一体となって、「悩める心を持つ子どもたちに寄り添い、居場所を与えること」が求められている。

聖学院大学は地域のために何ができるか？＝「世代を超えた学びの場」

多年にわたり大学は、高校を卒業した若者を対象に受け入れ、教育を行ってきた。しかし家庭や家族、そして社会状況の変化に対して、私たちも変わらなければならない。変化に対応することが求められているとすれば、聖学院大学は地域のために何ができるのか。

世代を超えた学びの場（私案）

地域の中の大学として、世代を超えた学びの場を作ることができないか。例えば「学童」である。聖学院大学には幼稚園、保育園から、小学校、中学校、高校の教員を目指す学生が多数いる。この教職志望の学生たちが、将来に向けてのトレーニングの場として、小学生、中学生、高校生の宿題や自習のサポートをする。外国人教員や英語教育を専攻する学生たちと、学生のみならず、地域の児童、生徒たちも出入りできるような「英語村」を大学内に常設する。生涯教育の場として、そして世界中からの留学生たちと接する場としても、世代のみならず、国籍をも超えて、学び、相互理解し合う可能性を秘めているのではないか。地域の中の大学は、「学

び場、語り場、そして遊び場」として、貢献できる可能性を持っている。

ひとりひとりの「居場所」づくり

学校は「同じ年齢の子ども同士の間関係を学ぶ」場であるとともに、「他者を通して、自己を見つめる」場でもある。かつては、家庭、隣近所、地域が繋がりあっていた時代においては、これも「人」にとっての重要な「教育の場」であった。しかし、人と人とのつながりが希薄になってしまった今日では、教育の現場にその機能が期待されている。そうであるならば、児童、生徒、学生、そのひとりひとりに「自信と自己肯定感」を持たせることのできる教育が必要である。

地域の中の大学は、教育機関として、教育を通して、どのような役割を、また責任を果たしていくべきか。授業の中でつねに意識していることがある。それは「全ての学生が、何かひとつの専門家をめざす」ということである。どんなに小さなことでも良い。全員が何かひとつの専門家をめざすこと。そして何かひとつの「専門家」になったら、「そのことに関しては私に任せてください」と言い合える社会を作ること。社会の構成員が、お互いに任せ、任せあえる社会をめざすことこそが、関係性が希薄になった社会の中で、「ひとりひとりの『居場所』づくり」から、新しい社会、新しい人と人との関係性づくりという「教育の目的」となるのである。